

墳丘墓群の築造が開始される^{註6}。松尾頭墳丘墓群は終末期を通して少なくとも5基の墳丘墓が築造されており、終末期前半から後半にかけて、西の10区から東の1区へ墓域が移っていた。松尾頭地区北側丘陵では、中期後葉～後期後葉の竪穴住居などの集落遺構が確認されているが、終末期には存在しない。古墳時代前期前葉に居住地として利用されるが、墓域を避けた丘陵頂部端に住居が数棟存在するのみである。このことから、終末期以降は北側丘陵が墓域として認識されていたと考えられる。古墳時代前期前葉には再び仙谷地区西側丘陵において墳丘墓が2基築造されるが、丘陵上の集落が消滅した古墳時代前期後半以降の墓域（古墳群）の中心域は晩田山と妻木山に移る。

このように、妻木晩田遺跡での集落存続期間における墳丘墓を主体とした墓域の変遷は、集落展開期である弥生時代後期前葉から集落衰退期である古墳時代前期前葉まで辿ることができる。各墓域で墳丘墓が造営されている期間は周辺を含めて竪穴住居等は存在せず、居住域と隔絶された区域であり、墓域として重視されていたと考えられる。

立地的には、洞ノ原墳丘墓群と仙谷墳丘墓群が居住域から隔絶されて直接視認できない位置に立地するのに対し、松尾頭墳丘墓群は近接する同地区の居住域からよく視認できる位置に築造されており、墓域の選地にあってはその点を重要視していると考えられる。長尾はこれを集落構造の変化による墓域の立地の変化として捉えている（長尾2017）。

なお、集落出現期の墓域は未だに発見されておらず、墳丘墓の「質（規模）」の観点からも未発見の墳丘墓が存在する可能性は考慮する必要があるため、現状では遺跡内の墳丘墓群と集落の変遷の関係性を全て把握できていないわけではない。

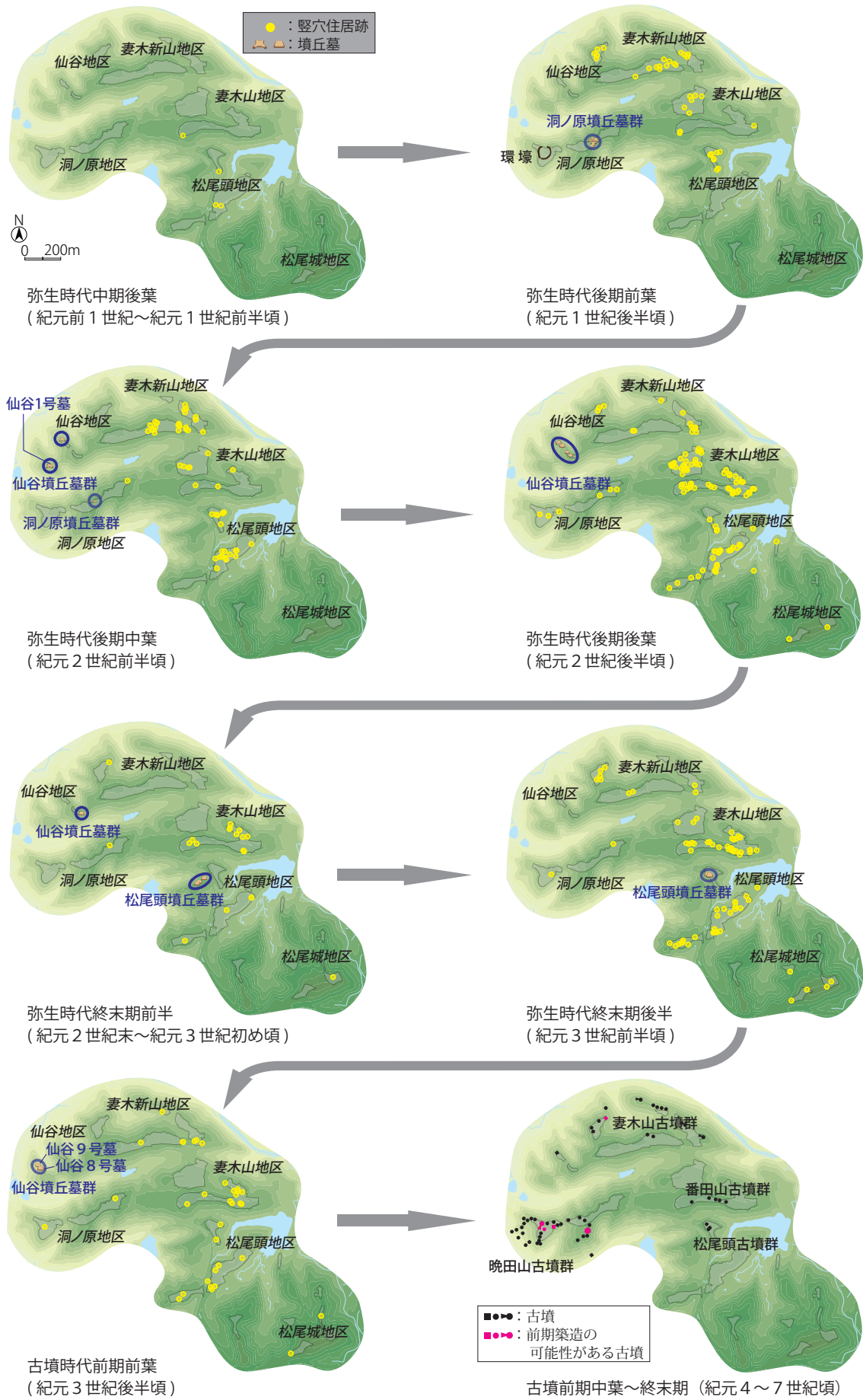
（2）墳丘墓の分類と築造過程、規模の変遷（第85・86図、第19表）

妻木晩田遺跡で確認している墳丘墓は、方形台状墓、方形貼石台状墓、四隅突出型方形貼石台状墓、方形周溝墓、円形台状墓の5種別である。後期前葉から中葉にかけては、洞ノ原地区において方形貼石台状墓（2号墓）と四隅突出型方形貼石台状墓（1号墓、8号墓など）が用いられる。後期中葉から造営される仙谷墳丘墓群では、引き続き四隅突出型方形貼石台状墓（1号墓）と方形貼石台状墓（3号墓）、後期後葉には四隅突出型方形貼石台状墓（2号墓）と方形周溝墓（5号墓）、方形台状墓（6、7号墓）が造営され、終末期前半には引き続き方形台状墓（4号墓）が造られる。終末期の松尾頭墳丘墓群では、終末期を通して方形周溝墓が造られ、再び墓域が仙谷地区に移る古墳時代前期前葉には、方形台状墓（8号墓）と円形台状墓（9号墓）が造られる。

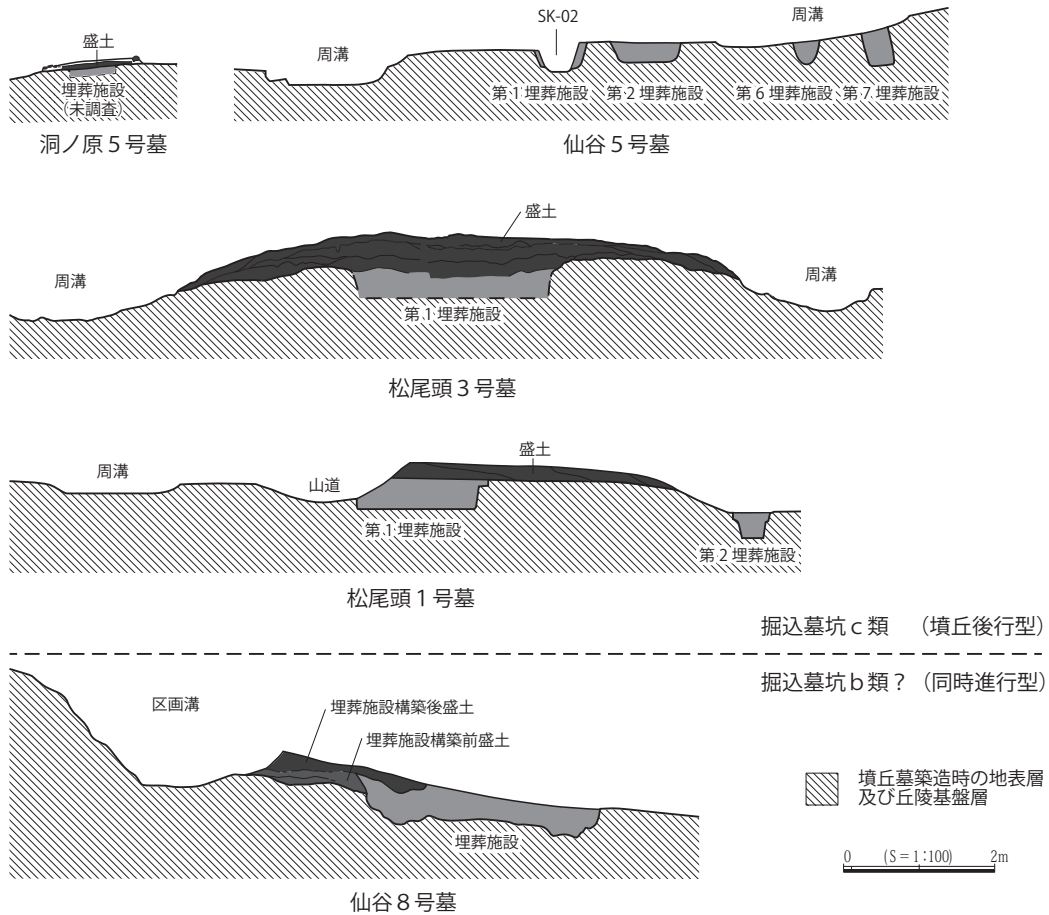
墳丘墓の変遷をみると、存続時期が2時期である洞ノ原墳丘墓群と松尾頭墳丘墓群は特定の墳丘墓を採用している一方で、存続時期が長い仙谷墳丘墓群は時期ごとに採用される墳丘墓が異なり、一見すると全く違う葬送儀礼に基づいた結果、墳墓の形が変化しているように見える。

しかし、墳丘墓の築造過程に限ると、松尾頭墳丘墓群の方形周溝墓は、平地で通常営まれる方形周溝墓とは異なり、墳丘を形成したのち中心埋葬の墓壙が掘り込まれるのではなく、墳丘墓築造時の地表層から墓壙が掘り込まれ、埋葬が終わった後に墳丘を盛土によって形成している（第85図）。すなわち、墳丘の築造方法は、前時期の洞ノ原墳丘墓群や仙谷墳丘墓群と同じく、当時の地形を活かして墳丘を成形する台状墓的な造り方を行っている。古墳時代前期前葉の仙谷8号墓では、一度盛土を行って地表面を整地した後に墓壙が掘り込まれ、埋葬終了後に再び墳丘全体を覆っている。

墳丘墓の形には全時期を通して細かい変化がみられるものの、弥生時代の墳丘墓の築造方法は墳丘墓群に共通して台状墓的な造り方を採用しており、古墳時代に入った段階で新しい棺とともに墳丘墓



第84図 妻木晩田遺跡における集落の変遷



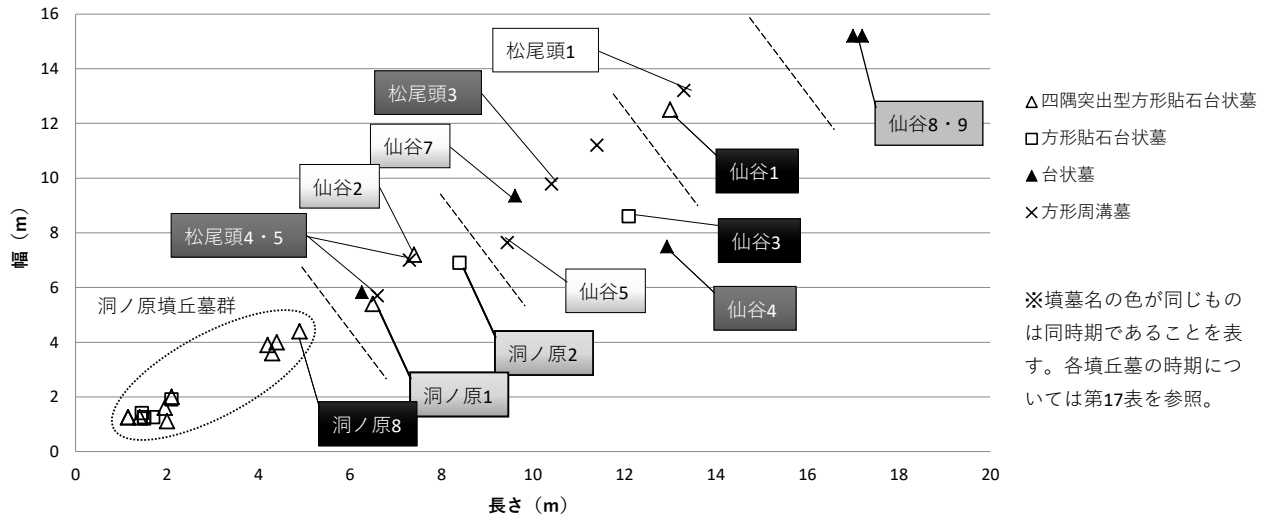
第85図 埋葬施設築造過程

の築造方法もより丁寧なものになっている(仙谷8号墓の埋葬施設構築前の整地のための盛土)。また、墳形がそれまで一貫して方形原理に基づくものであったのに対して、仙谷9号墓では円形を採用している点は、大きな変化といえることができる。

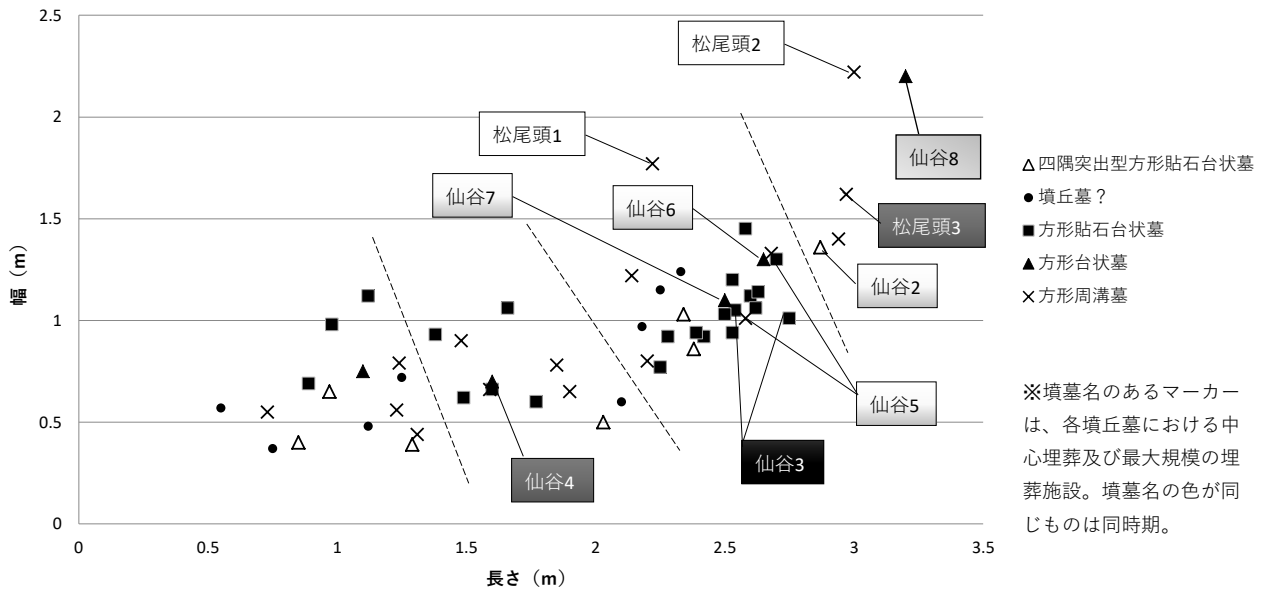
墳丘墓の規模からみると、各墳丘墓の規模は採用時は小型のものが多く、次の時期には大型化する(四隅突出型方形貼石台状墓: 洞ノ原墳丘墓群→仙谷1号墓、方形貼石台状墓: 洞ノ原2号墓→仙谷3号墓、方形台状墓: 仙谷4号墓→仙谷8号墓、方形周溝墓: 松尾頭3号墓→松尾頭1号墓)。全時期的にみても後期段階よりも終末期から古墳時代前期前葉の方が大型化している。ただし、大型化した墳丘墓であっても、山陰地域全体でみた墳丘墓の規模からみれば、弥生時代後期から終末期の「王墓」と呼ばれる墳丘墓には全く及ばず、概ね小型に分類される(渡邊2007)。現状では、妻木晩田遺跡では中・大型の墳丘墓は確認できない。妻木晩田遺跡の墳丘墓の中で最大のものが集落衰退期の仙谷8号墓であり、集落最盛期の後期後葉段階では小型の墳丘墓しか見られないことから、遺跡内に未発見の中・大型の墳丘墓が存在する可能性は否定できない。よって、墳丘墓の規模を同時期の他遺跡の墳丘墓と比較したとき、集団の対外的な権力差に結び付くかどうかはまだ結論が出せない。

(3) 埋葬施設の種類と被葬者の構成・空間配置 (第86～90図、第18・19表)

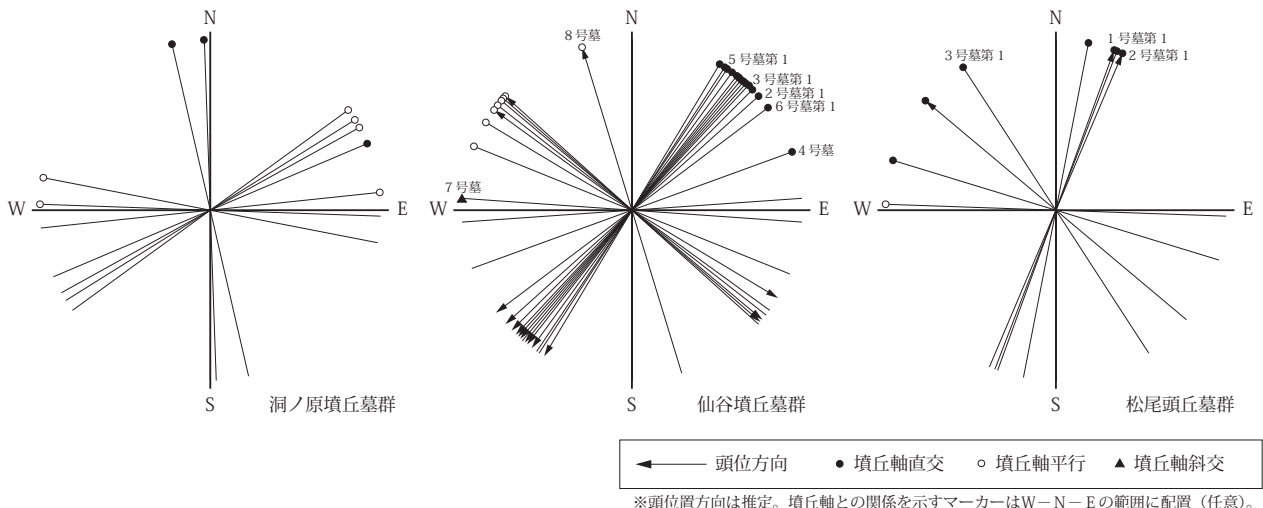
埋葬施設の種類は、弥生時代を通して組合式木棺もしくは棺の痕跡が確認できない土壌を用いており、古墳時代前期前葉に初めて石棺が採用される。墓壙の規模を比較すると、中心埋葬は規模の大きいものが多く、中心埋葬は終末期後半から古墳時代前期前葉にかけて最も大型となる(第87図)。木棺を比較すると、後期段階の仙谷地区の埋葬施設よりも、終末期後半の松尾頭1・2号墓は、墓壙の



第 86 図 墳丘規模比較図（妻木晩田遺跡）



第 87 図 埋葬施設（墓壇上端）規模比較図（妻木晩田遺跡）



第 88 図 埋葬施設軸と丘陵軸の関係